



監督・脚本・編集＝セディク・バルマク／出演＝マリナ・ゴルバハリ（アップリンク、ムヴィオラ配給／2003年アフガニスタン・日本・アイルランド映画／82分）

イラク戦争が「泥沼化」しようとしている今、その前にあったアフガン戦争は私たちの記憶から風化しようとしている。そんな時、この『アフガン零年』が公開されたことは貴重。髪を切り、少年の姿に変装して生き抜こうとする13歳の少女を通じて、生々しい現実のアフガンの姿が……。映画という芸術のすばらしさやその価値をあらためて思い知ることができる必見の作品。

🎬『アフガン零年』という映画の意義

アメリカにおける同時多発テロの発生は2001年9月11日。その直後からのアフガニスタン攻撃によって、アフガンを支配していたタリバン政権はあっけなく崩壊し、2002年6月にはカルザイ氏が暫定大統領となって、アフガン復興への道が始まった。そして2004年1月には、アフガン新憲法が採択され、男女平等の条項も盛り込まれた。

この『アフガン零年』という映画は、その復興アフガンでつくられた最初の映画。もっとも、その前にも、アフガンを舞台とした映画としては『カンダハール』がある。これは2002年1月にNHKの『クローズアップ現代』で取り上げられ、日本のいくつかの映画館でも評判を呼んだ。今年6月に大統領選挙と議会選挙が予定されているアフガンは、混迷を極めているイラクとは違い、今順調に復興の歩みを進めているように見受けられる。

しかしそれには、この映画に描かれたような大きな犠牲を伴っていたことを忘

れてはならない。

タリバン政権とは？

アフガニスタンでは、1994年のタリバンによるカンダハールの制圧、1996年のカブールの占領によって、タリバンが事実上政権を握った。1980年代にアフガンを支配しようとしていたのはソ連だったから、1990年代中頃は、アメリカは、1997年に結成され「反タリバン勢力」として後日有名になった「北部同盟」よりも、タリバン政権をむしろ歓迎していたほどだ。そして隣国のパキスタンもタリバン政権を承認していたほど。

タリバンを世界的に一躍「悪役」にしたのは、オサマ・ビン・ラディンの登場。アメリカは、1998年のケニアとタンザニアの米大使館爆破事件をオサマ・ビン・ラディンの仕業だと判断したが、タリバン政権はそれを否定し、オサマ・ビン・ラディンをかくまったため、アメリカも国連もタリバンに対して経済制裁政策を実施した。

そして、2001年2月のタリバンによるバーミヤン石仏の破壊に続いて、2001年の9.11同時多発テロが発生したため、アメリカは、これもオサマ・ビン・ラディンの仕業と断定し、一挙にアフガンを「北部同盟」の支援を受けながら攻撃したため、タリバン政権は2001年12月あっけなく崩壊した。

タリバン政権下における女性政策

タリバンは過激なイスラム原理主義を標榜するグループ。そのため1996年には独自のイスラム刑法を導入し、女性に対する抑圧は激しさを増した。またこの映画によると、タリバン政権下における女性は、「ブルカ」と呼ばれる目の部分だけが網状になった布で全身を覆うことを義務づけられることはもちろん、仕事に就くことも禁止され、学問も不要とされた。

映画の冒頭、夫や息子を失って仕事に就けない女性たちが、「これは政治的デモではない」「仕事を与えてくれと望んでいるだけだ」と訴えるデモの様子とこれに対する弾圧の様子が生々しく描かれるが、この映像を観ただけでも相当のショックを受けることはまちがいない。

主人公は13歳の女の子

この映画は、13歳の女の子を主人公とし、その母親そしてさらにその母親という3代の女性のアフガンの首都カブールにおける生活を描いている。夫や息子を失った女ばかりの3人家族では、仕事に就くこともできず、このままでは一家は飢え死にってしまうばかり。そこで考え出したのは、女の子の髪を切り、男の子に化けて仕事に就かせ、彼女に一家を養ってもらおうというもの。

この主人公の少女を演ずるマリナ・ゴルバハリーは激戦の地カブールの生まれだが、自分自身でも正確な生年月日を知らないとのこと。セディク・バルマク監督と偶然出会い、カメラテストを経て、即座に主役に抜擢されたほどだから、その「目の力」は強く、強烈な印象を与える女の子。しかし読み書きもできないため、セリフはシーンごとに口移しで覚えたとのこと。

そんな女の子だが、いやそんな女の子だからこそ、この映画での彼女の印象は強烈なものとなっている。

セディク・バルマク監督の熱意とNHKの良心が生んだ映画

以下、パンフレットの「孫引き」ながら、少し勉強しておこう。

この映画の監督は、1962年生まれのアフガン人のセディク・バルマク。ソ連の傀儡政権の下でモスクワへ留学して映画を学び、帰国後「北部同盟」に加わって、有名なマスード司令官（2001年に殺害）の下でドキュメンタリー映画を製作していたとのこと。

タリバン政権下ではパキスタンに亡命していたが、タリバン政権崩壊後カブールに戻り、2003年、この『アフガン零年』を完成させたとのこと。

他方、これに協力したのがNHK。NHKでは2002年1月、映画『カンダハール』を『クローズアップ現代』で取り上げたことを契機として、アフガンでの取材に取り組み続けた。そして、『アフガン零年』の主人公マリナ・ゴルバハリーを中心に取材し、これをNHKスペシャル『マリナ〜アフガニスタン・少女の悲しみを撮る』として2003年6月に放映した。さらに2004年1月にはバルマク監督をインタビューした『クローズアップ現代』も製作した。

パンフレットには、NHK 報道局ディレクターの中村直文氏による「“虹”のな
い風景～NHK スペシャル『マリナ』取材ノートより～」と題する文章がある。
そこでは2002年10月から2003年1月までの『アフガン零年』の製作風景が書かれ
ているが、これを読めば、死と隣り合わせの危険の中での映画製作であったこと
がよくわかる。

まさにこの『アフガン零年』は、バルマク監督の熱意とNHKの良心によって
生み出された作品なのだ。

上映はシネ・ヌーヴォ

イラン人のモフセン・マフアルバフが監督し、アメリカでは2001年の9.11テロ
の直後に公開され、日本では2002年に上映された、アフガニスタンを舞台にした
映画『カンダハール』の上映も、メジャーな映画館ではなく、マイナーな映画館
に限定されていた。そして、アメリカでは2004年2月に公開され、日本では2004
年5月に公開されたこの『アフガン零年』の上映も、大阪では「シネ・ヌーヴ
ォ」の1館だけ。

メディアの大量宣伝によって話題を先行させて、興味を集め、多くの映画館で
一挙に上映するというハリウッド型のスタイルが増えている今、こんな良心的な
映画は、シネ・ヌーヴォや第七藝術劇場のようなマイナーな映画館で口コミ的に
上映するしか方法がないというのが実情。

しかし、いつまでもそんな状態ではさびしい限り。私の映画評論を読んで、こ
のような良心的な映画にも興味をもってもらい、「良心的な観客」として是非、
シネ・ヌーヴォや第七藝術劇場を訪れてもらいたいものだ。

2004(平成16)年5月6日記